世界の難民情報を伝える

UNHCR NEWS

United Nations High Commissioner for Refugees

Number 11

1999年 第2号

Contents

Special Report

コソボ：変わり果てた故郷への帰還

Update

世界各地の難民状況

UNHCR

国連難民高等弁務官 日本・韓国地域事務所

SPECIAL REPORT

コソボ：変わり果てた故郷への帰還

「七つの国境、六つの共和国、五つの民族、四つの言語、三つの宗教、二つの文字、一つの国家」として多民族国家を誇ってきた旧ユーゴスラビア。しかし、1990年代に入って、民族間の争いが絶えなくなり、98年3月には、ユーゴスラビア連邦セルビア共和国コソボ自治州で、セルビア人とアルバニア系住民の長年の対立が激しい武力紛争に発展した。コソボは面積約1万0900平方キロで、人口約200万人のおよそ9割をアルバニア系住民、残りをセルビア人やロマなどが占める。

ユーゴスラビア当局によるアルバニア系住民の弾圧に対して、99年3月24日にNATOの空爆が開始。対立勃発から和平合意までの十数か月間に、多数の犠牲者と約150万人の難民・国内避難民が生まれた。UNHCRは空爆の間、コソボ内での援助活動を中断したが、その間も、難民の救済を近隣国で行ない、和平合意後は再びコソボ入りして、難民帰還と復興に向けた援助活動を続けている。

UNHCRは、人道援助の主導機関として、これまで、そして今後もコソボ難民支援で中心的な役割を担うが、難民帰還が進む中、残された課題も多い。こうしたUNHCRの活動をまとめて報告する。

UNHCR/U.Meissner

家族と5日間歩き続け、コソボから逃げてきた3歳半の女の子。
アルバニア、クケスの難民キャンプにて。

和平合意に至るまで

「途中の村で武装集団に殺された青年3人を埋葬した。いずれも目をえぐられ、耳を切り落とされていた。」「プリズレンから逃げてきたが、町では、子どもを含めた住民約400人がセルビア兵に家に戻るよう指示された。NATO（北太西洋条約機構）軍攻撃の際に、『人間の盾』にされるらしい。」

着の身着のまま、戦禍を逃れるために一時期、1日に1万5000人以上もの人々がコソボを脱出し、主にマケドニア、アルバニア、モンテネグロに避難した。難民のほとんどが女性や子ども、高齢者で、3〜18歳の人が40〜50%を占め、成人男性の姿がなかったのは、強制労働をさせられたり、処刑されたためだとみられた。

難民は、キャンプに収容されたり、一般家庭に身を寄せたほか、緊急人道避難計画によって第三国に移送された人々もいる。

収容力が限界に達したマケドニアのキャンプでは、1人当たりの平均面積が10㎡（UNHCR最低規準の3分の1）で、水も1日1人当たり20リットルに限られた。また、一般家庭に身を寄せた13万人近くの人も、過密で不自由な生活を送った。人道避難による出国者は約9万人、行き先は30か国近くにも及んだ。

コソボ外に逃れた難

コソボのこれまで

1974年	「74年憲法」により、独自の政府を持つ高度な自治権を獲得。
1990年	ミロシェビッチ現ユーゴスラビア連邦大統領が同自治州の司法・警察権をはく奪し、議会と政府を解散、自治権を有名無実にする。これに対抗して、アルバニア系議員が「コソボ共和国」の独立を宣言。
1991年	旧ユーゴスラビアからクロアチアとスロベニアが独立を宣言。
1992年	ボスニア・ヘルツェゴビナが独立を宣言。アルバニア系住民の独自選挙で、ルゴバ大統領を選出。
1997年末	「コソボ解放軍」（KLA）がセルビア内務省治安部隊を頻繁に襲撃。
1998年 3月	セルビア人とアルバニア系住民の間で戦闘が始まり、ユーゴスラビア当局による弾圧・非人道的行為が激化。
同　年 9月末	NATOがアドリア海に米空母を急派して対ユーゴ空爆を警告。9月までに35万人が国内外に避難。
1999年 2月	パリ郊外のランブイエにおけるアルバニア系代表とユーゴ・セルビア側の和平交渉が失敗に終わる。
1999年 3月24日	NATOによる空爆開始。この日までに、26万人が国内避難民となり、18万人の難民が近隣諸国に流出していた。UNHCR含む国際機関やNGOの外国職員がコソボから一時撤退。UNHCR職員3人が州都プリシュティナに残るが、コソボ内への援助は中断。
6月10日	和平合意が承認され、空爆が終結。ユーゴ連邦軍の撤退とコソボ平和維持部隊(KFOR)の展開が始まり、UNHCRの帰還援助も13日に本格的に再開される。

民よりもさらに厳しい生活を送ったのは、50万人に上ると見られたコソボ内の国内避難民。UNHCRなどによる援助が一時中断された事情もあり、食糧難に陥りながら森や山に隠れて暮らした。難民も国内避難民も、住み慣れた土地を追い出され、家族を失う悲劇の中、故郷に平和が戻るのを待ち焦がれる日々が続いた。

難民数統計（推定・アルバニア系住民のみ）

	6月9日現在	7月14日現在
	難民数最高時	最新
モンテネグロ	69,700	32,200
マケドニア	247,400	30,300
アルバニア	444,200	38,300
ボスニア・ヘルツェゴビナ	21,700	16,600
合計	783,000	117,400

この統計は、難民キャンプや一般家庭に避難したコソボ・アルバニア系住民のみの累計で、域外諸国への出国者は含まない。

UNHCR/U.R.LeMoyne

コソボからマケドニアに逃げる難民。3月30-31日。ブラツェ付近で。

UNHCRのこれまでの活動

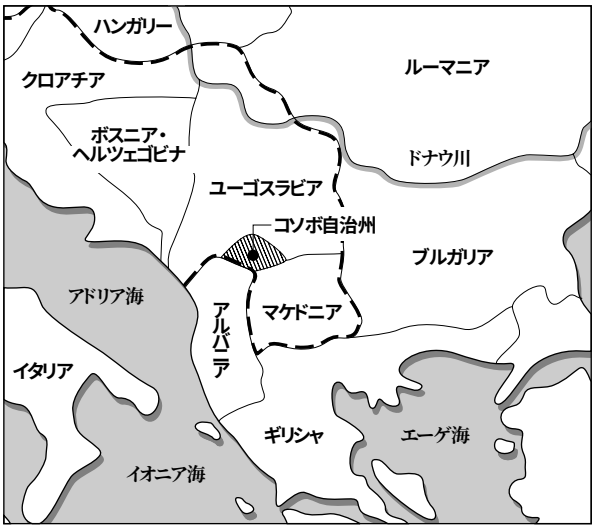
UNHCRは空爆の間、コソボ撤退を余儀なくされたが、隣国に逃れた難民に対応するため、他の国連機関やNGOと協力しながら、24時間体制の緊急援助を続けた。

ジュネーブ本部および世界中のUNHCR事務所から職員300人以上を動員し、キャンプの開設（アルバニアでは46か所設立）、国境からキャンプへの難民移送、緊急物資の配給、水・衛生・保健の改善などを行なった。5月末までに立てたこのような計画の数は31に上る。

具体的には、アルバニアやマケドニアに毎週テント2000帳を空輸し、毛布16万枚、炊事用品・食器4万セット、石鹸600トンを配布した。また、毎週40トントラック100台を使ってヨーロッパ各地から毛布、マットレス、衛生用品などを運んだ。

キャンプ地での緊急援助活動以外にも、UNHCRは様々な面からコソボ難民を支援した。政治レベルでは、緒方貞子高等弁務官が、ユーゴスラビア連邦のミロシェビッチ大統領に、アルバニア系住民の追放即時中止を幾度も訴えたのを初め、コソボ難民危機についていくつもの国際会議を招集した。マケドニアやアルバニアの政府には、難民の受け入れの継続を要請。さらに各国に対し、資金調達がこれ以上滞れば、UNHCRの活動を停止せざるを得なくなると警告した。

バルカン半島



は旧ユーゴスラビア

また、難民を受け入れたアルバニアの一般家庭約3万5000世帯に、難民1人当たり毎月最高10ドル（1家族最高120ドル）を支援。厳冬に備えた住居環境向上のため、1家庭に最高500ドルの援助も行なった。

さらに、UNHCRはIOM（国際移住機関）と共に人道避難計画を7月上旬まで実行。4月に現地視察をした緒方高等弁務官が、マケドニアのキャンプ状況の悪化を目の当たりにし、域外諸国にも受け入れを要請して、かろうじて難民の大量流出に対応した。

今回の援助活動で特に注目したいのが、マイクロソフト社と協力企業4社がUNHCRと結んだ「テクノロジー・パートナーシップ」。コンピューター・システムの寄贈によって、難民の速やかな登録と新たな身分証明書の発行が可能になった。これは、援助物資の配布や、離ればなれになった家族を再会させるうえで不可欠な作業である。着の身着のまま逃げ、身分証を奪い取られた難民にとって、自分を証明できる唯一の書類だ。 現代のコンピューター技術だからこそ実現した援助であるといえよう。

UNHCR/H.J.Davies

99年4月に現地視察に訪れた緒方高等弁務官。アルバニアのクケスで。

UNHCRの今後の活動

紛争の長期化が懸念された6月10日、ユーゴスラビア連邦政府とNATO軍の和平合意が成立した。UNHCRは13日、250トンの救護物資を積んだトラックとともに、コソボ自治州内に入り援助活動を約2か月半ぶりに再開した。

■緊急援助

著しく衰弱した国内避難民の救済をいち早く行なうために、UNHCRは援助再開最初の1週間で、毎日、救援物資100トンと食糧125トンを配布した。さらに視察チームを各地域に派遣して、安全を確かめながら、帰還民の受け入れ体制を作った。安全な帰還を進めるために、地雷・不発弾などの危険性について大規模な情報キャンペーンを行なったり、帰還途中に救援センターを設置して食糧や水を常備し、医療チームや故障車を直す機械修理の技術者を派遣した。

7月1日現在、UNHCR職員104人がコソボ自治州入りし、州都プリシュティナを初めとする七つの事務所を拠点として、他の国際機関やNGOの活動調整をし、緊急援助を続けている。例えば、プリズレン周辺を担当するカトリック救済事業団と共に、UNHCRは6月23日から一週間に、38村落、8万5000人に食糧234トン、衛生用品1万1804個、毛布5500枚、マットレス690枚、テント140帳を配った。

6月28日には近隣国からの組織帰還が始まり、7月15日には人道避難計画で域外の第三国に渡った難民の帰還が始まった。帰還の際の緊急援助は9月まで続く。

■長期的援助

和平合意当初は3－4か月間で50万人近くが帰還するだろうと見られたが、難民の帰還要望が思った以上に

コソボのUNHCR事務所と難民の動き

UNHCR 駐在事務所　難民・避難民の流出

現地から

人々に行き届く援助を
―アルバニアの現場で―

清水康子（UNHCRアルバニア事務所 コミュニティー・サービス担当官―99年1月～5月）

私は、アルバニアで、女性や子ども、高齢者、障害者など、特別な援助が必要なコソボ難民に対する物的・精神的援助を担当した。親子離散、性的暴力、戦争体験からくる精神的衝撃の他、マフィアによる売春強要や密売から女性や子供を守る課題もあった。

任務の中で一番頭を悩ませたのが、難民問題に世界の注目が集まりながらも、救援を最も必要とするグループへの援助が不足しているという実情だ。今回、高齢者や身体障害者に援助を提供したNGOはわずか3団体だけだった。

弱者の中の弱者、難題中の難題を取り扱うのは時間もエネルギーも知識も技術も要求される。人々に行き届く援助を実現するには、UNHCRだけでなくすべての人が難民問題に取り組むことが大切だ。

強く、7月23日現在、すでに70万人以上が自主帰還、または組織帰還によってコソボに戻った。しかし、故郷にたどり着いても、家が略奪、焼失、または破壊され、食糧や水のない生活を強いられている。

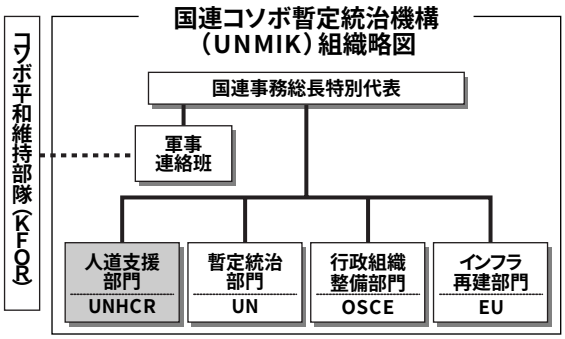
視察結果によると、コソボ内で破壊された家屋の数は、6万7000件にものぼる。UNHCRはすでに3万5000世帯分の住居補修材料を調達。窓や屋根用に木材、窓枠、ビニール・シートなどを用意し、冬までには、１家族最低1部屋で生活できるようにする予定だ。

また、農作期を過ぎてしまったため、食糧の供給は冬まで続ける計画である。世界食糧計画（WFP）は、7月1日〜12月31日に150万人分、およそ18万トンの食糧が必要だと判断。1人当たり1日米100g、小麦粉350g、缶詰入り肉30g、食用油35g、豆30g、砂糖10g、塩5g。冬期（11月―3月）は食用油30gを足す。

住居補修や食糧確保の他にも、UNHCRは汚染された水の浄化（調査によると、40%が汚染）や医療機関の設置、信頼と自信を取り戻すための心のケアを行なう。

しかし、和平合意当初のUNHCR活動は、コソボ紛争で直接被害を受けたおよそ150万人の難民・国内避難民しか対象にしていない。アルバニア系住民の帰還と同時に目立って増えたセルビア人やロマの難民の新たな援助は不可欠だ。UNHCRは新しい難民の援助をもうすでに始めているものの、冬までには、セルビア人・ロマ系住民計10万人が緊急援助を必要とすると見られる。その約半分が16歳以下と推定されることから、UNHCRの活動規模がさらに大きくなることは間違いない。

緊急援助が一段落しても、難民が自力で生活できるようになるまでには、長期的な援助が必要だ。6月10日に国連安保理によって採択された「国連コソボ暫定統治機構（UNMIK）」の人道支援部門の主導調整機関に任命されたUNHCRは、これからも多数の国連機関とNGOと協力して、難民・帰還民のサポートを続ける。



■資金調達

6月23日に発表されたUNHCRの資金計画では、コソボ難民・帰還民を引き続き支援していくためには、99年4月1日〜12月31日に、週1000万ドル（約12億円）、合計3億8900万ドル（467億円）が必要だと発表し、各国に資金拠出を要請した。7月21日現在、1億7000万ドル（204億円）しか受け取っていない。したがって、援助金が底をついている。先を見越しての物資調達に支障をきたし、援助を突如中止せざるを得なくなるだけに、資金調達が急がれる。

こんな状態の中、UNHCRに国際協力の手が差し伸べられた。G8のケルン・サミットでは、ドイツのシュレーダー首相が、ケルン交響楽団の募金コンサートを主催し、25万マルク（約1570万円）をUNHCRに寄付。6月1日には、テノールのパバロッティがイタリアでマライア・キャリーなどと共演し、コソボ自治州の学校建設や教育援助に向けて100万ドル（１億2000万円）を寄付した。

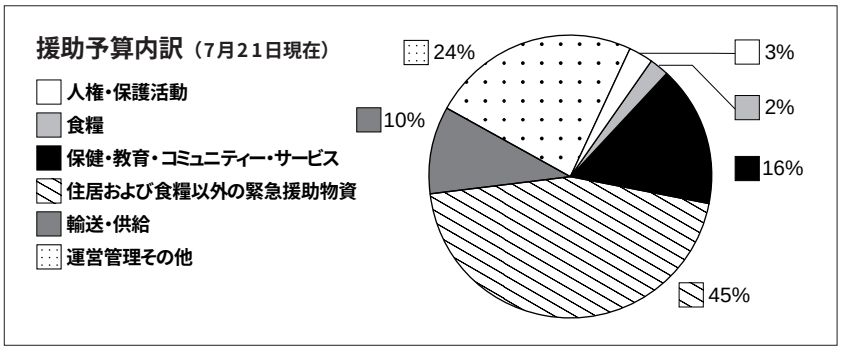
UNHCR/H.J.Davies

スタンコバッチ第一キャンプで行なわれた食糧の配給。（UNHCR/H.J.Davies）

援助物資っていくらするの？

生理用品	36円
ポリ容器	180円
衛生用品セット	480円
毛布	540円
マットレス	2040円
炊事用品・食器セット	2400円
テント	2万4000円

上記の物資の値段はすべて単価であり、$1=￥120の計算。輸送費は物資価格の15%。



日本からの支援

コソボに対しては全世界から支援が寄せられたが、日本の政府や民間からも厚いご支援が寄せられた。

日本政府は、阪神大震災で使用された神戸の仮設住宅500戸をコソボへ送るとともに、7月16日、UNHCRに対して1800万ドル（21億円）の追加拠出を発表。これで、日本政府からUNHCRへの拠出金は、合計4100万ドル（49億円）になった。

また、6月24日現在、UNHCR日本・韓国地域事務所には2927件、総額1億2390万円あまりの募金が寄せられた。民間団体、新聞社、政党、宗教団体、企業、学校などによる支援のほか、個人からの寄付が大半を占める。

学校での取り組みの一例としては、長野県の御代田中学校3年1組が、朗読や得意な歌を練習して、手作りのチャリティー・コンサートを開き、校内や地域で募金協力を呼びかけた。できるだけ長く難民支援を継続するつもりだ。

また、静岡県の足柄小学校6年1組では、コソボ難民のことを自ら調べ、自分たちに何かできることはないかと、募金活動やフリーマーケットを行なった。寄せ書きには、「また、フリーマーケットなどでお金を集めて送ります」とあり、10月には2回目を催す予定。

明治学院大学でも、募金委員会を結成し、「コソボの現状」というビデオを上映したり、街頭募金を呼びかけ、大学内での関心を高めている。

UNHCRではコソボ緊急募金を引き続き行ない、コソボ難民の一刻も早い安全な帰還と定着をめざして活動していく。また、バルカン情勢については、ホームページ上で常時公開する予定である。

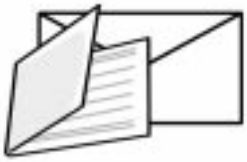
（詳しくは、http://www.unhcr.or.jp/を参照）

募金に添えられたメッセージ

「一日でもはやく笑顔で同じ地球の友が暮らせる日がきますように。（妹）少額ですがお役に立てて下さい。」
（尼崎市　H・Sさん　兄妹）

「活水中学・高校の寄宿舎118名で募ったお金です。皆が一日でも早く笑顔で生活できるように、役立てて下さい。紛争の早期解決を願っています。」
（長崎市　学校寄宿舎一同）

「I love the earth, too. I can't help you by myself. But I play the piano a hymn. So never give up! Never die. Let's sing a song together for the earth, for save our own the earth.」
（静岡市　Y・Sさん　女性）



「コソボ難民の人に手助けできないかと、少ないながら募金をしました。（2回目です）難民の支援のためにチャリティコンサートをひらき、地域全体の人で集めました。もとの幸せがもどるよう、がんばって下さい。」
（岐阜県益田郡　竹原中学校　生徒会）

「私達の小さな力が、あなた方ＵＮＨＣＲの手によって大きくなり、難民の子供達を助けて下さることに感謝します。」
（新潟市　M・Yさん　女性）

「家族と引き裂かれ着のみ着のままでの難民の姿、それは私達の明日の姿かもしれません。少なくてすみません。」
（生駒市　M・Ｉさん　女性）

「人種・宗教・思想の違う国々の人たちの支援は、人間全て同じと思っているからではないでしょうか。」
（四日市市　Ｉさん）

UNHCR/.H.J.Davies

ブラツェ。6万5000人のコソボ難民が国境に仮のキャンプをつくり、マケドニアからの入国許可が下りるまで滞在した。

引き続き、ご協力をお願い致します。

コソボ緊急募金の送り先

（郵便局の郵便振替用紙をご利用ください）

送金手数料が免除となる次の郵便振替口座を開設しました。
（旧口座もご利用いただけますが、手数料免除扱いにはなりません。）

口座番号：**00190-8-8870**

加入者名：**UNHCR**

「通信欄」に「コソボ」と明記してください。

また、メッセージをお書き添えください。UNHCRのホームページで一部紹介します。

Update

世界各地の難民状況

詳報はインターネットのホームページでご覧ください
http://www.unhcr.or.jp

コソボへ、神戸のプレハブ仮設住宅

UNHCRと日本政府は7月16日、ユーゴスラビア連邦コソボ自治州の帰還民・国内避難民に対し、阪神大震災の際に使われたプレハブ仮設住宅を提供すると発表、政府はまた同日、コソボ援助活動に1800万ドルを追加拠出すると発表した。

UNHCRのコソボ緊急住宅計画では、帰還民・国内避難民に対して、自宅の修理・再建のための工具やビニールシートなどを提供している。しかし、支給品だけでは修理が冬までには間に合わない家も多いため、プレハブ住宅に大きな期待が寄せられる。一部が臨時の学校や医療施設に利用される可能性もある。

UNHCRでは、日本のNGO「ピース ウィンズ・ジャパン」と協力し、プレハブ住宅の設置を行なう。

（99年7月16日現在）

クリミア・タタール人へ国籍取得申請を呼びかける

UNHCRは、クリミア・タタール人3万5000人に対し、ウクライナ国籍を取得する手続きの簡素化を今年中に行なうよう呼びかけた。遠隔地にも巡回して情報を伝えている。

クリミア・タタール人はスターリンによる粛正時代に現在のウクライナから中央アジア、特にウズベキスタンへ追放され、その数は40万人を超える。その後ソ連邦の崩壊と共に25万人がクリミア半島へ帰還したが、残りの多くは追放先に留まっていた。昨年ウクライナとウズベキスタンの間でクリミア・タタール人のウクライナ国籍取得を簡素化する協定が結ばれ、これまで2万5000人がウクライナ国籍を取得している。この手続きは今年一杯で終了する予定。

（7月22日現在）

中央アフリカ：新たな難民発生と資金不足

戦闘の続く中央アフリカでは、この3週間におよそ5万人がコンゴ民主共和国（旧ザイール）とコンゴから追われて難民となった。

コンゴ民主共和国では、7月10日に政府と反政府勢力との間で和平協定が調印されたが、その後も戦闘が続いている。緒方貞子高等弁務官は「危機打開のためには迅速な政治的解決が必要」と訴えた。

また隣接するコンゴでも、政府と反政府勢力が昨年12月以来戦闘を再開、今月に入ってすでに数万人の難民が隣国ガボンに避難を強いられている。

UNHCRはこれらの難民のために新たなキャンプを周辺国に設置しなければならないが、現在の予算では7万5000人を２週間援助するのが精一杯。今後も大量の難民流出がこの地域で予想されており、高等弁務官は拠出金の不足を訴えた。（7月21日現在）

アフリカ難民に継続支援を

緒方貞子高等弁務官は今年に入ってからアフリカを積極的に視察し、内戦の続いたシエラレオネなど西部やコンゴ民主共和国などの大湖地域を訪れた。7月中旬にはアルジェリアで開かれた第35回OAU（アフリカ統一機構）首脳会議に出席し、「UNHCRはアフリカの難民や帰還民を支援するが、和平が難民問題解決の鍵を握る」と述べた。

7月26日に開かれた国連安全保障理事会では、「コソボ支援の陰で、約600万人いるアフリカ難民への支援が軽視されている」と指摘し、シエラレオネなどの和平協定実行支援を求めた。（7月27日現在）

副高等弁務官にF・バートン氏

UNAID（米国国際開発庁）のフレデリック・バートン氏がUNHCRの副高等弁務官に任命された。

バートン氏は米国出身で49歳。ルワンダでの人権監視、アンゴラでの地雷除去などに加えて民間部門でも豊富な経験がある。緒方高等弁務官はこうした同氏の経験は、UNHCRの復興・開発計画の推進、また組織運営において大きく貢献するだろうと述べた。（7月5日現在）

新刊紹介

みなおなじ 地球の子
祖国は難民キャンプ

写真で綴る平和へのメッセージ。
世界の難民2,300万人。その半数は子どもです。

小林正典／写真
ジュディス・クミン／文　溜池玲子／訳
ポプラ社　定価：1,600円（本体）

序文＝緒方貞子（国連難民高等弁務官）

どこの国に生まれようと、地球に住む子どもたちはみんなおなじ権利をもっているはずです。難民問題はとてもむずかしく、答えをみつけることはかんたんではありません。みなさんが、この写真集をみて感じたことをわすれずに、大人になってくれることをねがいます。（序文より）

読む資料・見る資料

さしあげます

季刊誌

●「難民 Refugees」――― 難民問題の現状と保護・援助のあり方をめぐる情報誌。
特集には難民保護と国際社会の対応、人道援助活動をめぐる将来の展望など、各層の視点を紹介します。

パンフレット

1 難民女性とは ――― 難民の８割をしめるのは女性と子ども。暴力の犠牲となりやすい女性たちの実態を取り上げます。

2 「リーフレット」――― UNHCRの活動や難民問題の解決方法などを、イラスト入りで簡単に紹介しています。

「わたしたちの難民問題」― 大学生などUNHCRの若いボランティアが中心となって高校生向けにつくった入門書。（「僕たちの難民問題」改訂版）

「難民問題の手引き」――― 「難民問題の現状」「地域別にみる難民問題」「UNHCRの活動」などを教師向けにまとめました。
サイズ変形A5版

「難民の子どもたち」――― どうして難民になったのか、逃げる途中でどのような経験をしたのか、キャンプではどんな生活を送っているか、そして将来の夢など、子どもたちの声が聞こえてきます。小学生から高校生向け（20頁）

1.ポスター２種類 ――― 世界の難民の子どもが描いた絵画から、アフガン難民（12歳）とスーダン難民（17歳）の作品2点を選んでポスターにしました。
「あなたの子はこんな絵を描きますか」
サイズA2（42×59cm）

2.ポスターセット ――― 難民地図、UNHCRや難民などについての説明と写真で構成したセット。10枚一組。サイズA2（42×59cm）

2.コソボ難民ポスター――― マケドニアに逃れたコソボ難民のテントキャンプとコソボ国内避難民の写真。2枚一組。サイズA2（42×59cm）

ニュースレター

●UNHCR News（現在の難民の状況とUNHCRの援助活動）

募金箱 ――― 難民援助の募金にご協力ください。

●ボール紙製　8.5×18×13cm
●プラスチック製　8.5×18×13cm
※プラスチック製は折りたたみ不可
詳しくはお問い合わせください。

お貸しします

展示用パネル ――― 文字、写真パネル、世界難民地図を合わせ29枚が一組です。（68×47cm 2箱に収納）

※貸し出し希望期間、使用目的、主催者をお知らせください。（ご要望が多いため、2か月前にはお申し込み下さい。）

ビデオテープ

1（日本語吹替え版・字幕版）
●ほんのちょっと変えてみよう（14分）

2（日本語吹替え版）
●世界の難民はどこに'97-98（17分）　●難民女性（13分）

3（日本・韓国地域事務所制作）
●難民もみんなも同じ地球人（19分）中学生向き

UNHCR日本・韓国地域事務所はホームページを開設しています。ぜひご活用ください。
http://www.unhcr.or.jp

お問い合わせ先

UNHCR（ユー・エヌ・エイチ・シー・アール）
日本・韓国 地域事務所 広報室
〒107-0052 東京都港区赤坂8-4-14
TEL03-3475-4882
FAX03-3475-4884

資料や募金箱は、基本的に無料です。ただし送料と、資料枚数の多い場合はコピー代がかかります。広報室宛に、ご質問も含めて官製はがきでお申しこみください。できる限り「着払い」（宅急便または郵便小包）をお願いいたしますが、ご無理な場合、送料分の切手を、資料受け取り後、同封のアンケートと共に広報室宛てにご返送ください。

UNHCRニュース No.11
1999年7月
●発行
UNHCR日本・韓国地域事務所
広報室
●郵便振替
口座番号：00190-8-8870
加入者名：UNHCR

表紙写真
左上：反政府勢力によって手を切断され、ギニアに逃れたシエラレオネ難民。
UNHCR/C.Perthuis
右上：ラオスに帰還した子ども。親が働く間、幼い弟や妹の世話をする。
UNHCR/L.Taylor
左下：ボスニア・ヘルツェゴビナ避難民のセルビア系老婦。収容センターで細々と暮らす。
UNHCR/A.Hollmann
右下：国境から離れた安全なキャンプへ移送され、テントを立てるシエラレオネ難民（ギニアで）。
UNHCR/C.Schürpf